

『純愛ポートレート』

著：崎谷はるひ

ill：タカツキノボル

「訊かないんだな。ほんとに二股やってないのか、とか」

「だって博巳さんがそんなこと、やるわけねえだろ」

言いきると「ほら」と博巳はまた笑った。

「そういうとこ、篠原くんはやさしいよ」

「そんなこと、ないよ」

「あるよ。休みの日とかも、連れだしてくれたおかげで、すっごく助かった。ひとりでいると、鬱々しちゃうし」

迷惑だったところか、誘いがありがたかった、とまで言う。その小さな声に、亮祐は胸を締めつけられるような気分になる。

「……博巳さんは信用できるよ。ぜったい。そのうち会社のひとだって、わかってくれる」

「そうかな？」

「だって、酔っぱらって汚したエプロン洗って返して、菓子折まで持ってきてさ。そんな律儀なひとめずらしいよ」

コンビニにはいろんな客がくる。むろん、ほとんどはただ買いものだけして通りすぎるだけだけれど、迷惑な人間だって多い。店内を散らかして帰っていくひと、トイレを借りて汚していくひと、ひどいときには万引きしようとする客も。『迷惑をかけたから』とあんなにきっちり詫言とお礼を言いにくる人間は、とても希少な存在なのだ。

「あれは、嬉しかったから」

「なにが？」

「いやがらせも気持ち悪くてやだったけど。それより、俺って信用ないのかなって思わされたほうが、こたえたから。それでくさくさしてたら、篠原くん、すごい親切で。いいひと、いるんだなあって、嬉しかったんだよ」

ぽつぽつと語る内容から、あの泥酔してしまった日、それが中傷メールの出まわったときなのだと察せられる。

(ぜんぜん、知らなかった)

もうあれからずいぶん経つのに、そんな鬱屈はなにひとつ、博巳は見せることはなかった。おっとりとしているけれど、芯は相当に強いのだろう。

彼の清潔でやさしい雰囲気から考えても、あまり悪感情をぶつけられることには慣れていないのだろう。そのぶんショックも大きいだろうに、いまでも愚痴をこぼした自分が恥ずかしいと言うように、照れた笑いを浮かべている。

「ごめん、なんか気がゆるむんだ、篠原くんといると」

そして、もう立ち直ったかのような笑みを浮かべて、「かっこ悪いね」と言った。

「俺、いまの仕事好きなんだ。だから、それにまで水さされてちょっとがっかりしちゃったんだ。亀山さんにも、くどくど言われて」

どうも直属の上司である男は、博巳にきつくあたっているらしい。その名前のせいか、

亮祐はB級SF映画などに出てくる敵役の、爬虫類系下っ端モンスターの顔を想像してしまった。

(カメオトコが美青年いびってる図って、うつくしくねえなあ)

むっつりと黙りこんでいると、博巳は眉をさげて亮祐に謝ってきた。

「……ごめん、なんか、愚痴って」

「謝ることなんか、ないです」

亮祐の手は、その笑みに震えた心を表して小刻みに揺れていた。こらえきれず伸べた腕、触れた薄い肩は、酒に火照って熱い。

「あのね。ファインダー越しに見るとね。けっこういろんなもの見えるんだ」

その体温に気をとられそうになりながらも、できるかぎりのやさしい声を、亮祐は出した。

「それこそ本職のモデルも撮ったことあるけど、どんなに顔やポーズ作っても、機嫌のよしあしとか性格って、すっげえ出る」

学生でしかない、人生経験も浅く、ただちゃらちゃら遊んできただけの自分が、まじめでけなげなこのひとになにを伝えられるだろう。そう思いながら、懸命に言葉を探した。

「俺、まだ博巳さんと知りあって少しだけど、でもすっごい、見てきたから」

博巳ばかりを撮った画(え)はもう三桁を越えた。いろんな表情を撮ったと思う。もちろん、少し疲れたような顔や、機嫌の悪そうな顔もあった。

「だから俺は、博巳さんが誰かに恨み買ったりとか、そういうことするひとじゃないって、知ってるから」

写真は残酷なほどリアルを写しとってしまう。そして亮祐は、期間こそ短いけれど、カメラの向こうで少しずつ少しずつほどこけていく小井博巳を、濃密な視線で追ってきた。

そこに見つけた博巳は、一方的に眺めるばかりだったころ、『いいな』と感じた部分をひとつも損なわない、けれど気さくでやさしい青年だった。

(なに見てたんだかな)

博巳の抱えた痛みさえも見抜けなかったくせに。自分の目に傲(おご)りを感じながら、それでも、「あなたはそれでいい」と言ってあげたかった。

「俺といて楽なら、気い抜いて、いいから。あんま、我慢しすぎないで」

ささやくような声に、無様な欲が滲んではいけないだろうか。そう思っても、かき口説くような声は止められなかった。

そして博巳は、また潤んでしまった目を細めて、ふわふわした声で言う。

「……ありがと」

「お礼言われることじゃないよ。思ったまんま、言っただけ」

まっすぐに見つめあったまま、両肩を抱くようにしているこの体勢の密着度に、博巳はなんの疑念も抱(いだ)かないようだった。そのまま引き寄せると、さすがに苦笑した。

「女の子じゃないよ」

「うん、まあ、ノリで」

亮祐が笑って背中をぼんぼんと叩いてみせると、抱(ほう)擁(よう)は拒まずに、長い前髪を揺らしてうつむく。ほっそりした首筋が亮祐の目のまえにさらされて、目の毒だなと感じた。

博巳を知れば知るほど、比例して高まっていく恋心をなだめるのが、近ごろではか

なり苦しい。あいまいに笑ってやさしくするしかできない、自分が菌がゆくたまらない。

それでもいま、純粹に慰めだけ必要な博巳につけこむような真似だけはできない。なまなましい欲情など、いまは無視しておけと自分に言い聞かせた。

「モデル、役に立ってんのかわかんないのに……なんか、頼るばっかだなあ」

「そんなことないよ」

ささやくような声が吐息を混ぜて、亮祐の首筋に触れる。かすかなくすぐたさに震えそうになり、気にするなと伝える声がうわずらないようにと、そればかりを願った。

自分の心音が、ひどく大きく感じる。聞かれはしないかと思いながらも、さらさらの髪から漂うさわやかな香料の混じった彼のにおいが、亮祐の呼吸を苦しくさせる。

(やばい……酒入ってるくせに、なんでこんないいにおいするんだか)

腕に、少し身勝手な力がこもる。頬に髪をすり寄せてみても、博巳はあらがわれない。いくらなんでもこれはまずいかと思いながら、そっと、つややかな髪に唇を寄せた。

同じような体格だと思っていたけれど、腕の長さや肩幅は亮祐のほうが勝っていたようで、包みこんだ身体は抱擁のなかにきれいにおさまる。

いっそ、酒で前後不覚の間に、好きだとささやいてしまおうか。相手の反応次第では、もう少しさりげなく触れるくらいはいいだろうか——。

「博巳さん……」

声に、万感の思いをこめた。それでもなんのリアクションがない。さすがに不審に思い、亮祐はうつむいたままの顔を覗きこんだ。

「博巳、さん？」

そこには亮祐の危惧したような拒絶も、嫌悪の色もなく——あるのはただ、ひどく安らかな、寝顔だった。一気に脱力し、「こうくるか」と落胆混じりの苦笑が漏れた。

「まあ、そうだよな。じゃなきゃ、おとなしく抱っこなんかされねえか」

酔っていることを知っていながらつけこんで、抱きしめるまでできたのだから僥(ぎょう)倖(こう)というところだろう。

(なんもできねえ相手に、ここまでしてやるって……俺ってけなげだなあ)

布団を敷き、すっかり眠りこけた身体を横たえながらそんなことを皮肉に考えた。いままで、たとえ気のある相手にでも、こうまで尽くしたことはないかもしれない。

(しょうがねえよ。このひと、まったくわかってねえし)

おまけに落ちこんでいるし、哀しそうだし。慰めてあげたくて、しかたなかった。だから、眠る博巳の表情が穏やかに見えることには、ほっとしている。

だが、そうそう都合よくばかりしてもいられるほど、亮祐は枯れていない。

幸い、むなしいような脱力感が身体の直接的な興奮をさらっていつてはくれたが、気分的にはおさまりがつかなかった。

「こんくらいは、まあ、いいよな」

慰(なぐさ)め役のお駄(だ)賃(ちん)もらいますよ。

そっと、薄く開かれた唇を無許可で奪って、おやすみなさいとささやいた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>